



「小林多喜二」の出発点を探る

「ご著書『小林多喜二の思想と文学』について紹介ください。」

小林多喜二の文学は、満州事変（一九三一年）の頃、日本社会が急速に変化を遂げた時代に執筆されています。国際協調というスローガンの下で大正デモクラシーが謳歌されたのもつかの間、昭和に入ると、市民の自由と権利が著しく規制されていくこととなります。普通選挙法と治安維持法というアメとムチの政策によって、市民が抱いていた自由や平等といった理想がまったくの幻影とされ、理想を守ろうとする人間に対しては、過酷な弾圧が待ち受けていました。

多喜二の文学の魅力は、消えてしまえばそうになっていた理想を追い求めると同時に、不当な暴力に対して、毅然とした姿勢で立ち向かおうとしたところにあります。バラバラに分断されて無力化された《個》に再び息を吹き込み、《集団》として結束することによって、自分たちを支配しているものに

業者を二人もいなくしよう」というのです。ここで多喜二が主張しているのは、多くの市民が侵略戦争に加担していったのは、失業者の救済という経済的な理由からだったというのです。美しいスローガンの陰には、つねに落とし穴が待ち構えています。自分たちが豊かになれるのなら、他の誰かを犠牲にしても構わない。残念ながらこのような考え方は、今の世の中にも広く共有されています。ゆき過ぎた市場原理主義は、差別や貧困を放置し拡大させます。なぜなら、自分よりも劣ったものは、劣悪な状況におかれてもやむを得ないのだという誤った考えと結びついてしまうからです。

多喜二の時代、新聞紙法や軍機保護法などの法律によって、国の内外でどのような事態が起こっているのか、市民は正確に知ることができませんでした。《外国の脅威からの自衛》という理由を聞かされるだけで、戦争に反対することも許されず、戦時体制に動員させられていったのです。

多喜二は、生活格差の是正と侵略戦争の反対を訴えたプロレタリア文学運動に参加しました。しかし運動は弾圧を受け、運動の内部でも路線対立をめぐって分裂が生じることになりました。このような困難な状況のなかで、内外の敵と果敢に闘った多喜二の姿に魅力を感じました。

被爆地「広島」で過ごした勉学の日々

「学生時代の思い出を語ってください。」

私が大学生だった頃、日本経済はバブル景気の頂点にありました。友人はみな、複数の企業から内定をもらったり、公務員や教員試験に合格したりしていました。今日の厳しい状況からいえば、隔世の感があります。しかし私自身はバブルとは無縁の生活で、着ているものもみすぼらしく、書籍ばかりを購入していました。そのころから留学生の友人がたくさんでき、北京師範大学外国語学院の副院長になった王志松教授とは、夫婦ともども親

尾西康充 先生
人文学部教授

『小林多喜二の思想と文学』
：貧困・格差・ファシズムの時代に生きて』
〈大月書店、2013.9〉
[所在] 図・展示棚
[請求記号] 910.28 / Ko 12



対して異議を申し立てる勇氣を持つようと呼びかけたのです。

本書では、一人ひとりの人間に熱い血を通わせようとした多喜二の出発点を明らかにしました。料理屋で働きながら売春を強いられていた田口タキ、三・二五事件で特高警察による残酷な拷問にさらされていた同志たち―貧しさと暴力のなかで生きる権利を奪われようとしていた人間に対する深い共感から、多喜二の文学は始まったのです。

果敢に闘う「小林多喜二」に魅せられて

「『小林多喜二』に興味を持たれた経緯を教えてください。」

小林多喜二の小説のなかに、つぎのような一節があります。日本が満州（中国東北部）を侵略したのは、「ただ『忠君愛国』だとか、中国人が憎いことをするからやつつけるとか、そんなことからではない。満州を取ったら、内地の失業者はドシドシ満州に出かけてゆく、そうして行く行くは日本から失

交が続いています。

その一方、広島という都市で過ごした意味は、とても大きかったと思います。ちょうど被爆後四〇年に当たる年に入学しましたが、被爆者にとって四〇年は長いようで、実は短い時間です。なぜなら、決して癒されることのない傷みを抱えながら、生きることに、そして生きなければならぬことの意味をつねに問い直し続ける時間だからです。しかし彼らの記憶をよみがえらせるかのように、3・11フクシマをきっかけに、日本社会は大きな困難と向き合うことになりました。

「自己実現」から「社会的連帯」へ思想転換を

「最後に三重大学へ向けてメッセージをお願いします。」

将来は何がしたいのか、自分がなりたい職業は何か、ということだけを考えるのではなく、その職業に就くことによって、多くの矛盾を抱えた今の社会に対して、どのような貢献ができるのか、どのような変革を起こそうとするのか、を考えてほしいと思います。「自己実現」ではなく「社会的連帯」への思考転換です。

【尾西康充先生プロフィール】

広島大学大学院教育学研究科博士課程後期修了。現在、三重大学人文学部教授。専門分野は日本近代文学。文部科学省在外研究員としてオックスフォード大学キーブルカレッジに留学。北京日本学研究中心およびサンパウロ大学日本研究所客員教授。これまでの主な研究業績として、『田村泰次郎の戦争文学：中国山西省での従軍体験から』（笠間書院）、『「或る女」とアメリカ体験：有島武郎の理想と叛逆』（岩波書店）など多数。

ここから広げよう!!各学部の先生からの オススメ本 READING LIST

教養教育機構 杉崎鉦司先生

戸田山和久 著
『「科学的思考」のレッスン：学校で教えてくれないサイエンス』
NHK出版
[所在] 図・開架・図書
[請求記号] 404 / To17

科学的に考える能力は専門分野を問わず必要とされる能力だが、それを育てるには、そもそも「科学的思考」とは何か、あるいはより根本的に「科学」とは何かについて理解しておかねばならない。本書はこれらの問いに対する答えをわかりやすく解説した入門書である。科学的概念を解説した第1部は、特に理系の学生には、研究分野の背後にある基本的な思考法を理解するために必読と思われる。

生物資源学部 奥村克純先生

太田邦史 著
『エビゲノムと生命：DNA だけでない「遺伝」のしくみ』
講談社 ブルーバックス
[所在] 図・開架・図書
[請求記号] 467.7 / O81

まったく同じDNAから眼や心臓など異なる細胞ができるのはなぜ?がんや生活習慣病にも大きくかかわるエビゲノムの世界を、DNAは「裸」でなく「服」を着た状態で、環境によって服装を替えるのわかりやすく解説。最新の文献も掲載され、第一線の研究者である著者の極めて幅広い見識からのエピソードや雑談は文系の学生にも飽きさせず、理系の若者には必ずや心の灯火を点してくれる名著である。

工学部 清水真先生

國分信英 著
『フッ素の化学』
裳華房
[所在] 図・開架・図書
[請求記号] 435.33 / KO45

テフロン加工のフライパンは、現代生活には欠く事のできないものになっている。一方、冷蔵庫、エアコンなどではフロンガスが冷媒として多用されてきた。その結果、オゾン層の破壊という地球環境問題を引き起こしている。このように身近なところで話題にのぼることの多いフッ素の化合物について、本書では化学の視点からわかりやすく解説しており、ぜひ一読をお勧めしたい1冊である。

医学部 新小田春美先生

小林亜津子 著
『生殖医療はヒトを幸せにするのか?生命倫理を考える』
光文社新書
[所在] 図・開架・図書
[請求記号] 495.49 / Ko12

不妊夫婦が、子どもを生殖医療で望むケースが急増している。また、婚活ならぬ「婚前卵活」するシングル女性も現れてきたという。「新型着床前診断」など、生殖医療技術の急速な進歩は、子孫繁栄というニーズに答える福音をもたらす一方で、命の尊厳や人間観に倫理上のモラル・ジレンマも生んでいる。生殖補助医療の現状を知り、命の原点、家族観・親子関係の有り様を考えてほしい。

教育学部 松本昭彦先生

山本淳子 著
『平安人の心で「源氏物語」を読む』
朝日新聞出版
[所在] 図・開架・図書
[請求記号] 913.36 / Y31

『源氏物語』五十四帖の解説を各項の冒頭に置いた上で、それぞれの巻からトピックの一つ取り挙げ、それが平安時代においてどういう意味を持っていたか、いわゆる「古典常識」を親しみやすく解説する。だけでなく、桐壺の更衣のモデルに、作者と同時代の藤原定子の悲劇を想定するなど、著者オリジナルの部分も多い。「源氏物語」がどのような時代の中で生み出されたか、を知る恰好の入門書である。

人文学部 北川真也先生

酒井隆史 著
『暴力の哲学』
河出書房新社
[所在] 図・開架・図書
[請求記号] 361.4 / Sa29

暴力はいけません。これは当たり前のモラルだろうか。しかし、大学はモラルをただ尊重する場所ではない。むしろ、このような既成の価値をたえず問いの俎上に載せる場所のはずだ。物事の善悪を判断する前に、善悪で物事を判断する前に。本書はこうした立場から、暴力についての思考を実践している。暴力を生き抜き、それと闘ってきた思想家・革命家たちとともに、暴力と非暴力の境界は、そんなに明瞭なものだろうか。